

すえまつはいしあと 末松廃寺跡

末松廃寺跡は、^{はくほう}白鳳時代末の660～670年頃に建立された古代の寺院跡です。

1937年(昭和12)に地元の^{たかむらせいこう}高村誠孝氏の発案で発掘調査が行なわれました。この調査により古代の寺院跡であったことが初めて確認され、1939年(昭和14)には国の史跡指定を受け、後世へ守り伝えられることとなりました。その後、1961年(昭和36)には高村氏による^{わどうかいちん}和同開珎銀銭の発見があり、史跡の公園化を前提とした本格的な発掘調査の実施が望まれました。

1966・67年(昭和41・42)には文化庁によって発掘調査が行なわれ、東西幅が約80mある土堀内に、金堂を西、塔を東に並立させた^{ほっきじ}法起寺式の^{がらんはいち}伽藍配置をとる北陸最古の寺院の一つと判明しました。金堂の規模は東西19.8m、南北18.4mと飛鳥・白鳳時代においての一般的な大きさですが、塔の一辺の長さは10.8mと非常に大きく七重塔とも推定されています。また、金堂の周囲からは屋根に^ふ葺いた大量の^{かわら}瓦が出土しています。これらの瓦は、能美市の^{ゆのやようせき}湯屋窯跡で焼かれ運ばれたものであることがわかっています。

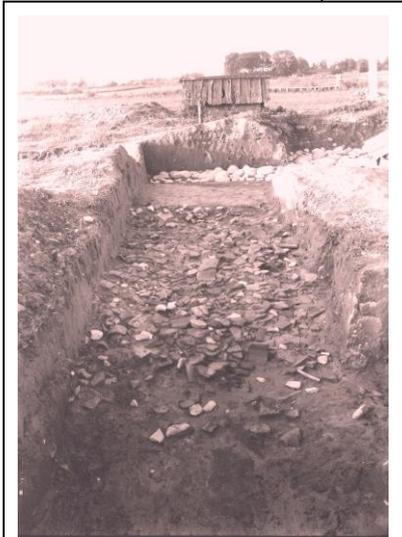
建立の主体者は、当時の北加賀地域を支配していた豪族の「^{みちの}道^{きみ}君」であるという説が通説化されてきました。しかし、最近の研究では、出土した遺物に加賀南部・能美地域産の土器が多くみられる

こと、これまで青戸室石であると思われていた^{とうしんそ}塔心礎が手取川の転石を加工した安山岩である可能性が高いことなど、加賀南部地域の強い影響があるとして、当時南加賀の豪族であった^{たからべ}財部氏などが寺の建立に大きく関与していると報告されました。ただし、道君が建立に関与していなかったとの確証は得られていません。当時の道君の勢力を考えると、その存在の大きさを無視して寺の建立を成し遂げられるはずはなく、その関与の仕方が注目されています。

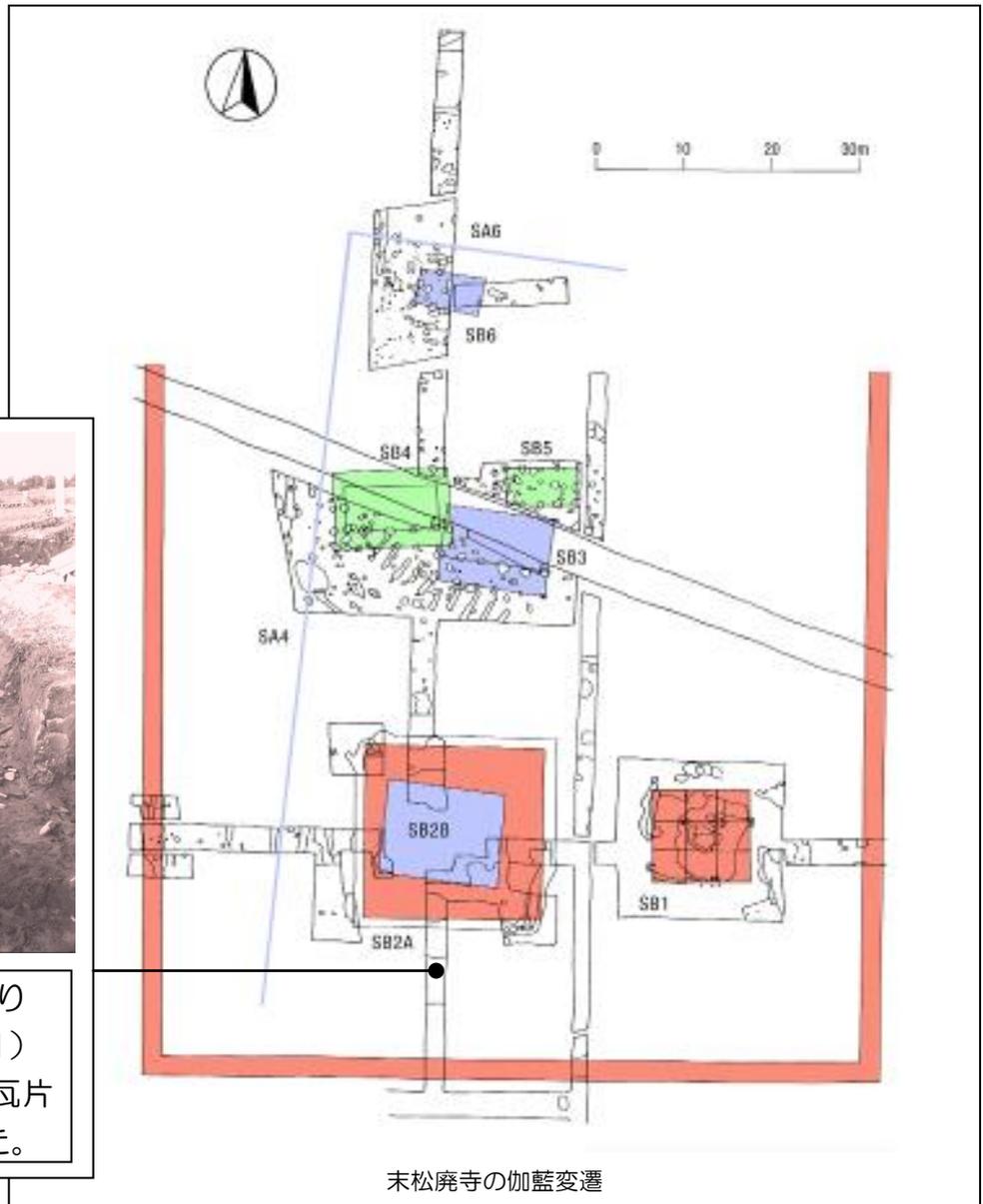
当時の寺院は誰もがお参りにいけるようなところではなく、建立した豪族が一族の繁栄を願い、その権力を^{こじ}誇示する側面が強いものでした。



発掘調査に参加した末松村の村人と出土品 1937年（昭和12）



金堂跡の調査 南より
1966年（昭和41）
※中央部に大量の瓦片
が見つかりました。



白鳳時代（創建時）の末松廃寺

創建時の金堂（SB2A）、塔（SB1）は50年余りで倒壊しています。その倒壊は725年頃までの時期とされています。



奈良時代の末松廃寺

空白期間において750年～800年頃に金堂（SB2B）が規模を縮小して再建され、北方には掘立柱塀（SA4・6）で囲まれる掘立柱建物（SB3・6）が存在します。



平安時代前期の末松廃寺

800～850年頃には掘立柱建物（SB4・5）が存在します。塔跡から瓦塔が出土しており寺院としての形を保っています。